文京ＯＧが日赤初の女性検査技師長に！

特集

「文京ＯＧ　日赤の伊藤技師長を囲んで」

平成20年の春に、文京学院大学医学技術専門学校が保健医療技術学部臨床検査学科に発展・移行し、49年の歴史を閉じました。その医技専時代の大先輩で、昭和46年卒業の伊藤洋子さんが、この春に日本赤十字社医療センター検査部技師長に就任されました。それを記念して、島田燁子理事長／学園長と小池盛雄副学長／保健医療技術学部教授が、当時の様子や現在のお仕事などについてお話を伺いました。

日赤の検査技師 1／3が文京卒業生

―現在のお仕事の内容をお聞かせください。

島田　今回の技師長就任、大変おめでとうございます。日赤での女性技師長は初めてとのことで、文京学院としても大変名誉なことです。

伊藤　ありがとうございます。そうおっしゃっていただけて、大変光栄です。技師長制度になってから、私は5代目ということです。これからは、女性技師長が珍しくはない時代になるのではないでしょうか。

島田　現在、検査技師は何人いらっしゃるのですか？

伊藤　54名おりまして、そのうち文京卒業生は17名です。一番新しい人は去年の卒業生で、癌研究センターのサイトスクリーナー（細胞診断士）でした。

小池　彼女は最初からサイトスクリーナーの資格を取りたいと、病理で卒業研究し、癌研へ行きました。

伊藤　日赤は最近、ダブルライセンスを持つ人を採りたいという希望があり、癌研のサイトスクリーナーコースを卒業された方を多く採用しています。

小池　サイトスクリーナーというのは、患者さんから採取した細胞の標本を作り、下見（スクリーニング）をして、異常な細胞がある時は印を付けて診断し、最終的に病理医にチェックを依頼する担当者です。そして、2人の氏名が付いた診断書が、臨床医に渡されます。

伊藤　ですから、技師であっても診断学に関わることになります。私は生理が専門で、超音波が得意分野です。超音波はそれをスクリーニングしている人間が判断するため、その部分に大変興味を持ちました。その診断書にもやはり、氏名が載ります。

小池　氏名が載るということは、その診断に責任を持つということですからね。どのようなプロセスで文京に入学されましたか？　伊藤技師長の学生時代とは、どのようなものだったのでしょう？

伊藤洋子技師長

学生時代は文化活動に没頭

伊藤　私は千葉県の松戸市出身で、地元の中学生時代は、演劇部に所属して3年間楽しみました。根本的に音楽が好きで、高校時代はギター同好会を創設しました。当時はフォークソング全盛時代で、ギターにとても興味がありました。実は文京の医技専にあったギター同好会も、先生のご紹介で明治大学のマンドリン部出身者に講師をお願いして、私と友人が創設したのです。2年になってからは病院実習が始まりましたので、土曜日ぐらいしか活動ができませんでしたが、その後永い間、ギター同好会が存続したとお聞きして、とてもうれしかったです。活動は文系ですが、学科は化学が大好きで、一生懸命勉強しました。医療に関しては何も知りませんでしたし、特に検査技師になりたいという願望はありませんでしたが、母が親しくしている方の姪御さんが文京の医技専にいらして、私にも勧めてくださいました。

当時は、山梨大学工学部附属発酵化学研究施設（現ワイン科学研究センター）でワインの醸造を学びたいという夢がありましたが、「自分はどう生きるべきか」をよく考えた末、文京に入学しました。時代は学生運動が真っ盛り。私は、東大安田講堂事件（一部の過激派学生が、東大本郷キャンパスを違法に占拠。大学から依頼を受けた警視庁が、1969年1月18日から19日に封鎖解除）の年に医技専に入学しましたので、多くの学生が自分の生き方を考えた時代だったと思います。

超音波診断に自らの活路を開く

―実習の様子を。

島田　先ほどお話に出た実習も、日赤でしたね？　検査センターの一員として実習に参加するので、指導も厳しく大変だと多くの方々がおっしゃっていますね。

伊藤　はい、実習病院を決める時に、担当の先生からも日赤での実習の大変さをお聞きしました。でも、それに勝る魅力を感じて日赤を選びました。

島田　当時から生理検査を希望されていたのですか？

伊藤　いえ、むしろ逆で、やりたくなかったのです。当時は自分で判断して、きちっと結果が出せる検査をしたかったので、細菌検査をやりたいと思っていました。そのころは病院を建て替える時期で、検査技師も沢山必要でした。実習に一生懸命取り組んでいたせいでしょうか、生理検査に残らないかと2度の打診をいただきました。当時の生理検査の上司がとても尊敬できる方でしたので、日赤に就職を決めました。ただ、生理検査は心電図と脳波だけで、心電図は電気測定がなくてドクターの介助を務めました。やがて超音波診断の走りの機械が導入され、上司はそれを積極的に採り入れる方でしたので、使い方を段々覚えていくうちに、「やり方によって、自分のものにできる」と考えました。

島田燁子理事長／学園長

―就職後の様子を。

島田　日赤では、その分野のパイオニアとして、色々工夫やご苦労をなさったのでしょう。

小池　機械も不安定だった時代でしょうね。

伊藤　はい、心眼で見るという状況でした。当時は勉強会が盛んに行われていましたので、私もあちこち勉強に出かけました。腹部エコー（超音波）を担当するうちに、診療と関わることになり、肝硬変の患者さんを診ました。これらの患者さんは肝癌ができやすいですから、超音波検査の介助役を務めました。肝硬変の患者さんは、繰り返し治療が必要で、とても辛いのです。先生は厳しいことを言わなければならないわけですが、私が一緒に関わると、患者さんが「安心する」とおっしゃってくださいました。辛い治療を繰り返すのであれば、肝硬変が小さいうちに見つけて、少しでも楽にして差し上げたいと、さらに超音波診断の勉強を重ねました。担当の先生が超音波を頻繁に使いましたので、その後ろにも立ち、勉強しました。

島田　早期発見に努められたのですね。検査技師も関わり、まさにチーム医療ですね。

小池　そうですね。超音波診断装置は、肝臓専門の外来をなさっている先生が「外来にもエコーがほしい」とおっしゃるほどの機能を持っているわけです。データ上はほとんど何もない肝硬変の患者さんで、ある時突然癌があると判ることがありますから、外来でエコーを撮りたいと多くの臨床医がお望みです。

伊藤　日赤は患者数が多いので、先生方に暇がなく、私たちに任されることが多いです。

小池　そのくらい肝細胞癌の診療の中で、エコーが占める割合が高いということですね。

伊藤　はい。それで最終的にCTやMRIを撮るわけですが、超音波はそのきっかけです。患者さんと接することが出来て、やりがいのある仕事だと感じました。

島田　生理検査部門に行かれて、結果的に良かったですね。

伊藤　はい。ここ5～6年はローテーションを組み、今は生理検査が半分で、後は生化学、免疫の検体をやっています。それにより、検体を見る目も上がりますし、それを超音波検査診断に反映できますから、相乗効果があります。勿論、ひとつのことを深くという方法もありますが、他の検査を経験することにより、自分のやりたい分野が広がる場合もあると思います。病理のサイトスクリーナーの免許を持って、細胞診をずっとやってきた方が、就業後にエコーを学び、認定試験を受けて合格。現在は、細胞診と腹部エコーの両方ができます。

11名の係長 うち6名が文京出身者

島田　臨床検査技師の特色として、オールマイティーであるということがありますが、一方ではスペシャリストも兼ねなければならないわけですね。ところで、どのような段階を経て技師長になられたのですか？

伊藤　組織は、技師、係長、課長、技師長です。係長は11名で、そのうちの6名が文京出身者です。

島田　まぁ、それはすごい！　皆さんの記念誌によると、「文京出身者であることへの信頼」「文京出身者だから出来て当たり前」という高い評価と期待をいただいているようですね。

伊藤　やはり、文京出身者は熱心ですね。最近係長になった方も、検体をやってから生理検査に来て、さらに超音波を学び、資格を3つ取っています。また、次の係長候補の方も熱心で、超音波の資格を3つ取り、救急法指導資格も取りました。また、産休中にNST（栄養サポートチーム）の認定を取った方もいます。

小池　それはすごい！

島田　家庭との両立という点ではいかがですか？

伊藤　私たちの時代は特に厳しかったですね。子どもを2カ月で保育園に預けなければなりませんでしたが、保育園が見つからずに苦労しました。私の場合は、夫の協力もありましたし、子どもも順調に育ってくれましたので、結果オーライというところでしょうか。現在は、かなり優遇されていまして、産休と育児休暇が1年、保育園が見つからない場合、3年までは育児休暇が認められます。その後、小学校入学前までは勤務時間の短縮が認められています。

小池　良い制度ですが、一般的には行われていませんよね？

伊藤　日赤ですから、厚労省の形どおりの勤務になります（笑）。代わりに周囲の人間は確かに大変になりますが、それはお互い様ですから、うちのスタッフはとても理解があります。

島田　在学中の皆さんに、「臨床検査技師は看護師さんと比べると、家庭と両立しやすいので頑張りなさい」と言った記憶があります（笑）。

伊藤　就職先の体制によるのでしょうが、日赤の検体や生理検査では外来が終わるまで遅番を決めて仕事をしますので、必ずしも早く帰れるわけではありません。母親になった人は夜勤は免除されますが、日赤は24時間365日体制ですから、4月から2交代制を採っています。

島田　技師長としてのご苦労はいかがですか？　病院の体系はどのようなものでしょう？

伊藤　人やローテーションなど管理の問題が、今は一番大変です。あとは検査室にとって良い環境を整えるため、病院側との交渉などもあります。でも、上がいないわけですから、課長時代の交渉のほうが気が楽でした（笑）。病院の体系は、ドクターとコ・メディカル（医師の指示の下に業務を行う医療従事者）がいて、その中で一番大きい組織は、1000人近くいる看護師です。放射線技師、リハビリ、臨床工学士、栄養士などもコ・メディカルということで、ひとつの部にいます。臨床検査技術部もあり、病理部、検査部も独立しています。チーム医療に関して、一般的には医師、看護師、臨床工学士、放射線技師はよく言われるのですが、「臨床検査技師」という言葉が出るチャンスが少ないように思います。

小池　それは多分、考え方だと思います。私は大学院を終えて虎ノ門病院へ行きました。そこは病理も輸血もそれぞれ部に分かれていましたが、院長は「全体として検査部として考える場合、その中央部門がしっかりとしていないと病院はだめである」と強くおっしゃっていたので、検査部はとても強かったのです。先ほどのコ・メディカルですが、某県立病院が検査を含めてひとつにしようとしたのですが、やはりうまくいきませんでした。臨床検査技師は表に出る機会が少ないですから、認知度が低いように思えますが、実際は臨床検査のデータがなければ、医師が外来診療や入院医療をすることは、まず出来ません。

白衣姿の伊藤技師長
（日赤医療センターで）

伊藤　その意味で、臨床検査技師の地位を上げる必要があると思います。

小池　私も病理で同じ思いをしていますが、その大切さを自分たちが言うのではなく、臨床の先生方がおっしゃってくださらなければ難しいですよね。

伊藤　つまり、そうおっしゃっていただけるように、私たちは信頼される仕事をしなければいけないということです。組織編成の際、踏ん張って検査部はひとつの部として残していただきました。これから先、私たちが色々認定を取り、臨床検査という学問で臨床側を補えるような力をつけなければいけないと思います。

島田　今日の医療は、検査データなくして行えないのではないでしょうか？

小池　そうですね。先生方はデータを基に色々判断されるわけですから、とても重要な分野です。

島田　確かに地味な職種かもしれませんが、医学の基礎を構成されているわけです。文京の卒業生が、このように頑張っていらっしゃり、職場で信頼されていることを本当にうれしく思います。

文京で培った「誠実」「勤勉」「仁愛」の精神で

―後輩にアドバイスをお願いします。

伊藤　これからは、チーム医療にきちんと参画できるような力をつけていただきたいですね。検査技師職は医学には必要な分野であり、その先には患者さんがいらっしゃるわけですから、大きな役割を担っているという意識で、堂々と頑張っていただきたいと思います。

小池盛雄副学長／教授

小池　私は病理ですから、技師さんがいらっしゃらなければ仕事が成り立ちません。患者さんは、医師が全部を診ているのかと思いますが、実際は違うわけです。

伊藤　例えば、臨床検査技師が患者さんに検査データについて説明したり、チーム医療が必要な場で、検査の立場できちんと物が言えるような実力をつけていくことが大事だと思います。まずは、自分がやりたいことを明確にして、文京で培った知識を基に、真面目に真摯に努力すれば、必ず道は開けます。文京生は皆、創立者・島田依史子先生が掲げた「誠実」「勤勉」「仁愛」の精神、人として大切な土台を持っています。社会に出てからが本当の意味での勉強だと思いますので、自分の進みたい道を早く見つけて、一生懸命頑張っていただきたいですね。

島田　保健医療技術学部では、「三医志会」という同窓会を発足させました。これからもぜひ、良い情報をいただければと思います。

小池　今後のご活躍を楽しみにしております。